

EL（ヨーロッパリーグ、Europa League）でデビューした久保建英

ここまでラ・リーガで先発のチャンスを与えられなかった久保が、22日のELグループリーグ戦第一戦の対スィヴァススポル戦（トルコ）に先発し、ビジャレアルに移籍して初めてフル出場を果たした。MOM（Man of the Match）こそ、試合を決める2点を上げたアルカセルに譲ったが、試合全体を見れば、久保の活躍はMOMにもっともふさわしいものだった

わずかな出場時間しか与えてこなかったエメリ監督の久保の起用をめぐって、外野の批判が渦巻いていた。こういう扱いをするなら、冬の移籍期間にレンタル契約を破棄して、先発が確実なチームへ再移籍させることも選択肢の一つという議論がわき上がっていた。保有元のレアル・マドリードはELの試合が入ってれば、国内リーグとELで選手を回わしていかなければならないので、いずれ久保の出番は来ると踏んでいたが、その第一戦で見事にその存在価値を示した。

流動的なポジション

試合前のポジション表示では久保が右のインサイドハーフ、久保のライヴァルであるチェクウェゼが左のインサイドハーフと表示されていたが、実際にはチェクウェゼが右のインサイドハーフに入り、久保はバッカと並んでトゥートップ気味の右に入った。このポジショニングが前半の2点を生んだ。

前半13分に右からのチェクウェゼの強烈なシュートをキーパーがはじいたところで、中央左にポジションを取っていた久保がゴール前に詰め、利き足の左で押し込んだ。この先制点が久保のビジャレアル移籍初ゴール、EL初ゴールになった。

さらに前半20分、ペナルティエリア右後方でパスを受けた久保は、前にいたバッカに絶妙なパスを出し、バッカがそれを難なく決めた。トゥートップを形成したり、バッカの下にポジションを取るトップ下に入ったりする中央での球さばきが、得点に繋がった。

そこから1点を返されたが、再び33分にペナルティエリアの中央後方からの久保の長いパスがバッカに当たり、パスを受けたバッカがペナルティエリア内で倒され、ペナルティキックが与えられた。ここでバッカが決めていれば、3-1と楽な展開になり、久保のMOMが確定するところだったが、バッカがこれを外してしまい、しかも前半終了間際に同点にされて、試合は振り出しに戻った。

後半に入り、久保の役割が変わった。右のインサイドハーフに入り、チェクウェゼが左インサイドハーフに入った。しかも、久保はコーナーキックのキッカーを任されることになった。右コーナーからのキックだけでなく、左コーナーからのキックも任された。これが再び、ゴールを生む。56分、久保の左コーナーキックがドンピシャで、DFフェイトのヘディングシュートを生んだ。これで再び、ビジャレアルは3-2と試合をリードすること

になり、久保はこの試合二つ目のアシストを記録した。

ここまで、久保はビジャレアルのすべてのゴールとチャンスに絡んでいる。まさに縦横無尽の活躍である。

試合はもつれる

スイヴァススポルはトルコのチームだが、先発をみると、アフリカ系の選手が 7 人ほど入っていた。彼らは体も大きくスピードもある。170cm の小柄な久保が、身体能力の高い彼らと堂々と渡り合っているのだから、頼もしい。

この試合、ビジャレアルのリードは長く続かず、63 分に絶妙なフリーキックを決められて、再び 3-3 の同点になった。ここから久保は右から中央あるいは左にポジションを変えながら、ボールを繋ぐことに専念するようになった。初めてのフル出場でスタミナが懸念されたが、息を切らしながらも、最後まで相手のへのプレスに専念した。守備に問題があると言われていることを意識した、懸命なカヴァーリングだった。

最終的に、終盤に 2 点を追加したビジャレアルがホームゲームを制した。久保に対するビジャレアルの選手の信頼が確立した試合だった。久保にボールを預ければ、チャンスが広がるという信頼が生まれている。久保への信頼が生まれれば、ボールが回り、久保の球さばきの技術が活きる。

昨シーズンのマヨルカでも、チームメイトの信頼を得るまで長い時間が必要だったが、ビジャレアルでは 10 月の段階でチームメイトの評価を得ることになった。この試合は、エメリ監督が久保の役割や評価を大きく変えるゲームになったはずだ。これから久保とチェクウェゼの共存が見られることになろう。

南野も躍動

前日の 21 日には、CL (チャンピオンズリーグ、Champions League) のリヴァプール対アヤックス戦で、南野に出番が回ってきた。先発も予想された南野だが、この試合でもベンチスタートとなった。リヴァプールの前線はマネ、フェルミーノ、サラーの世界でもトップクラスの選手で固められていて、なかなか南野に出番が回ってこない。ただ、昨シーズンの CL で、ザルツブルグの前線でハーランドとともに、リヴァプールを苦しめたことが評価されて、南野のリヴァプール移籍が実現した。フェルミーノの代役を想定されてのことである。しかし、これまで代役の仕事も満足に与えられてこなかった。

21 日の試合は雨の中、ボールが重くなり、リヴァプールの主力は国際マッチ週間から戻ったところで、疲れが溜まっていた。南野も代表チームで戦ったが、欧州内の移動で疲れがそれほど溜まっていない。それにたいして、フェルミーノはブラジルからの長時間の移動である。

後半 15 分、 Klopp 監督は思いきった選手交代を行った。疲れて動きの鈍い前線の 3 名をそっくり変えたのである。ジョッタ、南野、シャキリの 3 枚が同時に前線に送りだされ

た。アヤックスに押され気味だったゲームは、活きの良い 3 名が入ったことで、リヴァプールは生き返った。得点こそ生まれなかったが、南野とチャッキリが左サイドから中央への攻撃に絡み、リヴァプールの攻撃が機能し始めた。南野は試合終了まで前線のプレスに駆け巡り、アヤックスの反撃を抑え、前半に上げたオーンゴールの 1 点を守りきった。南野はシュートを 2 本放つチャンスもあった。ゴールこそ生まれなかったが、南野の役割や機能が明確に示されたゲームだった。

世界の最高峰のリーグや欧州クラブ選手権での日本選手の活躍はうれしい限りだ。日本ではそれほど知られずに欧州に渡り、今やチームの大黒柱になっているシュトゥットガルトの遠藤航やフランクフルトの鎌田大地、引手あまたのボローニャの富安健洋など、若い選手が国際舞台で活躍している。頼もしい限りである。